



## 六甲山系の岩石（磐座）にまつわる 民話・伝承

会員 江頭 務

### 1 六甲山系について

六甲山系は阪神間の市街地の背後、西は塩屋から東は宝塚まで、幅約10 km、長さ約30 kmにわたって連なる細長い山系である。最高峰は931 mで1000 mに満たないが、市街地に近いことから市民の憩いの場となっている。

六甲山系には、会下山、城山、保久良、金鳥山、伯母野山、布引丸山等の多数の弥生時代の高地性集落遺跡が点在し、磐座との関連も想定できる。

磐座については、荒深道斎氏が昭和6年（1931年）に実施した探査が有名で、六甲山頂の三国岩・天の穂日命の岩、（いろいろ岳の剣岩・八咫の鏡岩が世に紹介された。また、檜崎臯月氏がタカムナ文献を書写したと言われる金鳥山、大槻正温氏の「巨石を使った古代の天文台」がある北山も六甲山系にある。

### 2 磐座と民話・伝承の関係

磐座は、言うまでもなく古代人の祈りの対象となった岩石である。

様々な信仰が時代と共に栄枯盛衰を

くりかえしてきたが、信仰の場は過去の靈地を踏襲したもののがかなりある。

実例として、土着の宗教とみなされる古神道と、外来の宗教である仏教の関係を見れば明らかであろう。寺を建立するには、その寺を建立する土地が靈地であることが重要であり、その証明が何らかの形でなされなければならない。この時、民話・伝承は有力な論拠を提供する。

このことから、民話・伝承が生まれた岩石には靈的な過去が存在し、磐座につつながっている可能性があると言える。

本稿ではかかる見地から、それが磐座かどうかは別として、六甲山系の岩石にまつわる民話・伝承を幅広く紹介する。民話と伝承の区別は明確ではないが、（い）では物語性の強いものを民話とし、それ以外を伝承として扱つた。

尚、詳細については下記のHPを参照願いたい。

「山なんでもウオッチング」

<http://www.eonet.ne.jp/~yamauo2005/>

### 3 六甲山系の岩石（磐座）にまつわる民話・伝承

#### ①甲山

この山は、藤本浩一氏の著書「磐座紀行 1982年刊」に磐座としてとりあげられている。西宮市にある甲山は、昔、神山（かうやま）とも言われ、神奈備山（神の座する山）であり、その麓にある神呪寺の南には、磐座で有名な目神山（女神山）がある。

下記に紹介した民話と伝承の共通点は「甲山の山頂に宝物は埋まっている」点であり、山頂から石鍬、銅矛、弥生式土器等が出土した事実と見事に一致している。

〈民話〉西宮ふるさと民話  
<http://www.nishi.or.jp/~siryo/minwa/>より

天皇の第四妃は、都の西の方の山にあまりにも美しく光る雲がかかっているのを見て甲山までたどりついた。野にはいろんな花が咲き乱れ、地中からは蒸気が立ちのぼって五色に輝

き、空には大きな美しい蛾がこの山を守るかのように黒い息をはきながら空高く舞っていた。妃は不思議に思い頂上に登つてしまらく茫然といつぱいになり、その中から突然、美しい女神が現れて「ここは『魔尼（まに）の峰』と言つて、その昔宝をうめた所です。仏様を祀るにはとても良い所です」と告げて姿を消した。

妃は大変喜んで尼となり、神呪寺を開基した。

り 〈伝承〉神呪寺の由緒書きよ

仲哀天皇の時代、神功皇后が国家平安守護のために、山に如意宝珠・金甲冑・弓箭・宝剣・衣服等を埋めたと伝えられ、このことから甲山と名付けられた。

#### ②石の宝殿

石の宝殿は、昔六甲山の山頂と考えられていた。また、この地は芦屋川と住吉川の分水嶺にあたり、水との深い関わりから雨乞いの場所でも

あつた。石の宝殿は、越木岩神社と

西宮神社の奥宮とも言われている。

磐座は、お宮のある石の宝殿の少し

南の蛇谷北山を望む清々しい場所に

ある。高さ数メートルの二つの磐座

が左右対称の形で東西に並んでいる。

近くの、おこもり谷には、今なお現

役の行場がある。

下記に紹介した民話は、石の宝殿が越木岩神社の奥宮であることを雄弁に物語っている。また紹介した伝承は。六甲山の謂れの一つとなつて

いる神功皇后伝承が石の宝殿にもあることを示している。

り 〈民話〉西宮ふるさと民話  
<http://www.nishi.or.jp/~siryo/minwa/>より

雨乞いのために六甲山の上に「石の宝殿」を建てるに至った越木岩の上新田（かみしんでん）と下新

田の二つ村は、屋根の部分は上新田で受け持ち、下の方は下新田で受け持つことになった。山の上に運び上げて据え付ける約束の日が来て、上新田の村人は屋根をかつぎ上げたが、下新田の村人はなかなか登つてこなかつた。待ちきれなくなつた上新田の人たちは、屋根を置いて山をおいてしまつた。後から来た下新田の村人は、しかたなく大岩の上の重い屋根をのけて下の部分を組み立て、もう一度屋根をかぶせ疲れきつて山を降りた。

この時の「石の宝殿」建設をめぐるごたごたはその後も尾をひいた。とにかく石の宝殿はできあがつたが、雨はいつこうに降るけはいがなかつた。

「村の者たちが仲たがえをしているから、神さまもそっぽを向いておられるのじや」やつと自分たちの誤りに気づいた両方の村人たちは一緒にになって越木岩神社の前に集まつて護摩をたき、「雨を降らせてください」と心の底から祈つた。護摩の煙が空高くのぼり、石の宝殿までなびいていった。それに合わせ、松明に火をともした村人たちは石の宝殿に登り、天にこだまするような大きな声で祈つた。すると、大きな黒雲がわき出たかと思うとあたり一面をおおい、やがて、大粒の雨が滝のように降り始めた。

それ以後、越木岩の人たちは日照りが続き水不足になると、石の宝殿まで登つて雨乞いの祈りをささげるようになった。

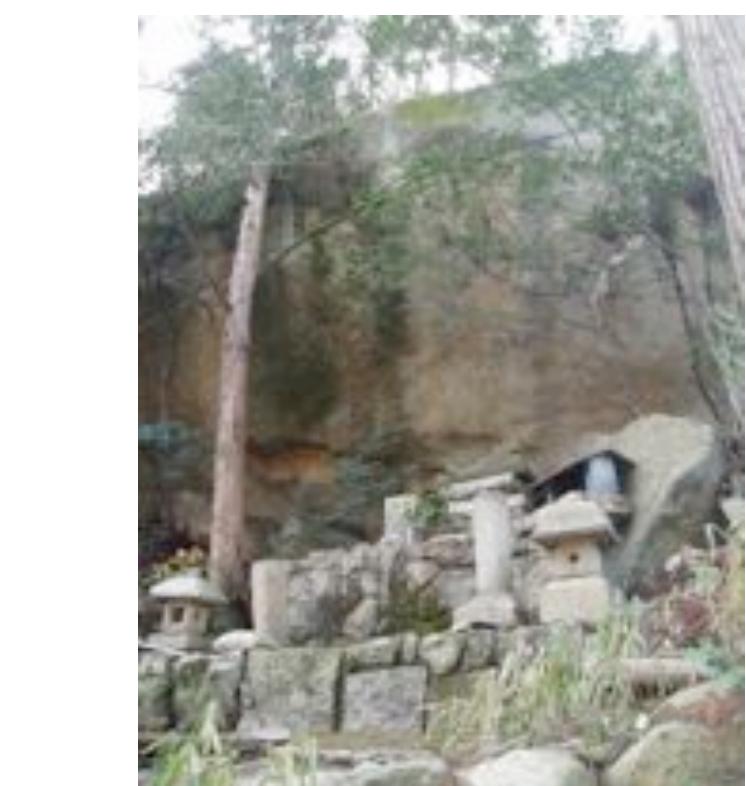
〈伝承〉「六甲山」　ヤマケイ関  
西　2003年刊　p144より

六甲山最高峰の東の独立峰の頂にある石の宝殿には、大昔、神功皇后が韓から持ち帰った神様の石を納めたという。また、この石祠のそばの三つ葉ウツギの根元に神功皇后が黄金の鶴を埋めたとも伝えられる。それ



石の宝殿の西側の磐座、  
この岩のすぐ東にも同じような磐座がある

で、毎年の正月元日の夜明け前には、埋められた黄金の鶴の鳴き声が六甲の山々に響き渡るのだそうである。



白山大神・白神大神が祀られた弁天岩

乞いのための水神社があり、立て札によれば弁天岩から移転したとある。

また、白山大神・白神大神の石碑が建っていることから、白山権現を祭る石宝殿との強い関係がある。

建っていることから、白山権現を祭

場所は、芦屋と有馬を結ぶ芦有（ろゆう）ドライブウェー沿いの芦屋ゲート近くにある。すぐ近くに芦屋川が流れ、弁天滝の上に鱗切り岩がある。

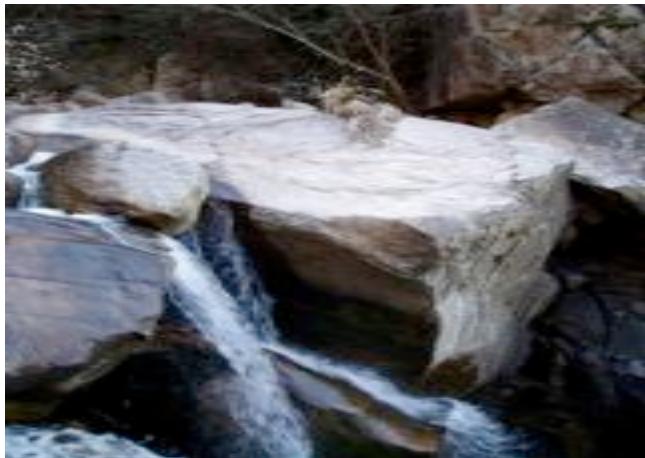
「磐座紀行」によれば、弁天岩も磐

弁天岩は、水神の住処として江戸時代から、山麓の芦屋・打出の村人たちの雨乞いの場であった。弁天岩の近くにある弁天滝の落ち口にある大石は、

〈伝承〉あしや子ども風土記  
伝説・物語　芦屋市教  
育委員会　1992年刊  
p20～24 「水神さん  
と鱗切岩」より

座とのことである。

鱗切り岩とかまな板岩と呼ばれていた。早魃が続くと人々は打出の沖で大きな鱗を捕らえ、その岩の上で鱗を切り刻んで弁天岩に投げつけた。そうすると、住処を汚された水神が怒って血糊を洗い流すため大雨を降らせると信じられた。



弁天滝にある鱗切り岩(まないた岩)

#### ④荒地山の七右衛門穴

り  
備考　この話は、六甲山にも残る  
民話としてはかなり有名で、出典は  
多数ある。しかし、詳細に読むと微  
細な点でそれぞれに異なっている。  
民話とは、もともとそのようなもの



整備中の七右衛門穴

昔、荒地山への登り道に七右衛門穴と呼ばれる人一人がやつ通り抜けられる岩穴が立ち塞がっていた。

登山者は、その穴をくぐって荒地山の山頂に向かった。その岩穴は1995年の阪神大震災でつぶされたが、最近になって昔の七右衛門穴が復旧されつつある。まだ穴は開通していないが、この穴を再び通ることができるのも近いかもしれない。岩の間から漏れる日の光は神々しく、ここが磐座である可能性を感じさせるに十分である。

七右衛門穴の前はちよいとした岩の広場になつてお、またここから半時間ほど歩いて下つたところに城山の高地集落があつたことから、古代の祭場であつた可能性も考えられる。

昔、麓の芦屋村に七右衛門という身寄りのない若者がいた。もともと正直な働き者で村人にも愛されていたが、兄のように慕う友人に裏切られ

であろう。ここでは、整合性を勘案して話をまとめ上げたので、引用文献とも微妙に異なる点もある。

荒地山は、六甲の山の神である石の宝殿の権現の住処と言われており山中で悪事を働くと、この荒地山に迷い込んで神罰を受けるのだと信じられていた。

「山中で悪事を働くから、きっと荒地山だ」言い伝えを信じて荒地山に登つた村人は、この岩穴で頭を砕かれて絶命している七右衛門を発見した。

## ⑤越木岩神社の餌岩

越木岩神社は、古くから巨岩信仰で全国的に知られた西宮市の有名な神社である。越木岩神社の餌岩（こしきいわ）は、機能的には岩戸（いわと）と呼ばれる鳥居のようなもので、奥に稚日女尊宮（わかひるめのみこ



見るものを圧倒する巨大な餌岩

神で  
あり、  
雨乞

に降臨し、御子の高野大神とともに  
大和・紀伊を巡った後、天野原に鎮  
まつたとされる。また、一説には天  
照皇大神の幼名であるとも言われて  
いる。

説明の立て札によると、六甲山の石  
宝殿は、越木岩神社に分祀されてい  
る貴船社の奥宮である。貴船は水の

一つに繋がっている。まさしく、今  
も昔も、水こそが人類生存の源であ  
る。

民話における石宝殿と餌岩の鶏の声  
の類似性はおもしろい。また、越木  
岩神社は北のえびすとも呼ばれ西宮  
神社と対応し、両社は、共に石の宝  
殿を奥宮とするのも興味深い。

## 〈伝承〉越木岩神社の由緒書きより要約

餌岩は、高さ10m、周囲40m  
の花崗岩の岩で、その形状が酒を作  
る時の餌に似ていることから名づけ  
られた。古代信仰の靈岩とされ、今  
を去る約1100年前には、この岩  
より煙が立ちのぼり、海上を行く船  
からも見えたと伝承されている。こ  
の神の鎮まる靈岩を大阪城築城のた  
めに切り出そと、村人達の制止の  
懇願を振り切つて、豊臣秀吉が石工  
に命じて割らせたところ、今にも割  
れんとする岩の間より、鶏の鳴き声  
が聞こえ共に真っ白な煙が立ち昇り、  
その靈気に石工達は、岩もろとも転  
げ落ち倒れ臥し、如何にしても運び  
出せなかつたと伝えられる。

## ⑥麻耶山頂の天狗岩

六甲山にはやたらと天狗の名を冠し  
た岩が多い。昔、岩の上に座す山伏  
の修行者を村人が天狗に見たてたも  
のである。摩耶山に至る登山路の天  
狗道は、ここを目指す道であつたこ  
とがわかる。摩耶ロープウェイの広  
場の賑わいをよそに、林に囲まれて  
薄暗い秘めやかな場所である。

尚、天狗岩には猿田彦大神の碑が建  
てられていた。猿田彦大神の碑は、  
一般には神道系の「庚申塔」と見な  
されるが、ここでは猿田彦が鼻の高  
い大男で天狗のモデルであつたこと  
の意味が強いと思われる。猿田彦は  
天孫降臨の際、地上で道案内をした  
と伝えられる地神で、道祖神にもな  
っている。

## 〈伝承〉天狗岩大神の説明板よ り

『摩耶山の僧が山中に出没す  
る天狗をこの岩に封じ込めた』

との磐座がある。稚日女尊宮は、  
天照皇大神の妹神で、神代に紀伊国  
伊都郡（かつらぎ町）奄田（三谷）

いの神である。「雨乞い」の  
キーワードによつて貴船社、  
石宝殿、弁天岩、鎌切り岩が

である。

場所は、六甲山人工スキー場の西にあり、すぐ近くには磐座といわれて

いる熊野大権現、六甲比命大善神、

心経岩がある。

〈参照文献〉

「六甲山の地理－その自然と暮らし

－」田中真吾編

神戸新聞出版センター 19

88年刊 p162



猿田彦大神の碑が立つ摩耶山頂の天狗岩

⑦雲ヶ岩

雲が岩、蜘蛛の岩、紫雲賀岩とも呼ばれることがある。『雲が岩』と『雲ヶ岩』は単なる表記上の差異と考えられる。「蜘蛛の岩」の名前は、「雲の岩」の言い換えと推測されるがなかなか面白い。

(文献参照)

紫雲賀岩は、雲ヶ岩の元々の正式名

で修行中、紫の雲に乗った毘沙門天がこの岩の上に現れたといわれ、紫雲賀岩と呼ばれていたが、略して雲が岩となつたようだ。現在は、多聞寺より、春秋二回、お参りがある』

〈伝承〉「六甲山の昔と今」

六甲会 1969年刊より

『この雲が岩は、有野町唐櫃にある多聞寺の奥の院として、今より千二百年前(大化九年)孝徳天皇の御代に、

インドより渡つた法道仙人がこの地

で修行中、紫の雲に乗つた毘沙門天

がこの岩の上に現れたといわれ、紫

雲賀岩と呼ばれていたが、略して雲

が岩となつたようだ。現在は、多聞

寺より、春秋二回、お参りがある』

⑧夫婦岩

この岩は、「磐座紀行」に磐座としてとりあげられている。この岩は、今も甲山の麓にある北山貯水池の方を通る市道の真ん中にどつかと居座つていて、通行の邪魔になつている。岩は大きく二つに分離しており、その間には幹の直径が11cm程度の木が生い茂つている。この岩の近くに夫婦池と呼ばれる大小の二つの



市道の真ん中にどつかと居座る夫婦岩

〈伝承〉磐座紀行 藤本浩一

1982年刊より

この岩は昔からその祟りを恐れられていた。道路建設の際、岩をくだいて避けようとしたが工夫が次々とわけもなく負傷したので設計を変更し、岩をそのまま残して道路を上り下りの左右に分けた。

池がある。夫婦岩の名はここから付けられたものと思われる。

## ⑨会下山の蛙岩

古書によれば蛇巻岩(じやまきいわ)とも呼ばれていたそうである。(文献①②参照) そう言われば、岩の上部が蛇の頭、下部がとぐろを巻いているように見えてくる。正反対の見方が面白い。さらに古い昔の絵図をみると「狼岩」と記されているそうである。(文献③参照) 蛙岩は、阪急芦屋川駅から登るハイキングコースの魚屋道にあり、歩いてすぐのところに、弥生時代の高地集落である会下山(えげのやま)遺跡がある。古代人もこの蛙岩を見ていたことを想像すると興味はつきない。

〔参考文献〕

①「新しい六甲山」 山下道雄著 山溪文庫 1962年刊 p151

②「六甲—摩耶—再度山路図」 直木重一郎著 関西徒步会 1934年刊

③あしや子ども風土記 伝説・物語 芦屋市教育委員会 1992年刊 p53 「かえる岩の伝説」の末尾

### より要約

昔、六甲山に驚くほど大きな蛙が住んでいた。飛ぶと地響きがし、泣くと木の葉がふるえた。気のいい大蛙は、何も恐れることなく毎日のんびりと暮らしていた。

ある日のこと、大蛙は大蛇が自分の命を狙っていることを耳にした。それからは、少しのことでも怖がり、びくびくして暮らすようになった。その大蛇が六甲山の梅谷にやつてきた。するすると地面に体をすべらし、鎌首をもたげて大蛙を飲み込もうとした。大蛙はもう逃げられないと死を覚悟して目をつぶった。ところがその一瞬、大蛙は岩になつた。六

甲の山の神は、日頃おとなしい大蛙を哀れに思い、そのままの姿で岩にされた。大蛇は、岩になつた大蛙に歯も立たず、くやしがつてここに住むことにした。

それからしばらくして、村人がたきぎを取りに山に来た。蛙岩のところで一休みしたが、ついうとうとと昼寝をしてしまった。ふと目をさますと、大蛇が蛙岩に巻きつき上からこちらをうがつている。村人は、

命からがら逃げ帰った。このことが村中に広まり、若い衆が蛇退治にかけた。梅谷に着いて大蛇を探した

が、どこにもいない。ふと蛙岩を見ると、大蛇が蛙岩に巻きついたまま岩になっていた。

それからは、蛙岩は蛇巻岩とも言

われるようになつた。山の神は、大蛇だけでなく、大蛇も分け隔てなく岩にしてしまわれた。梅谷の蛙も蛇も仲良く岩となつた身では、争うすべもなく平和な日々を送つた。

### 蛙の後姿にそつくりの蛙岩

## ⑩大土神社の蛙岩

六甲ケーブル下近くの大土神社で蛙岩を調査中、偶然にも大土神社の神主さんに出会つた。蛙岩はもともと神社のずっと下の方にあり鉄の柵で囲われていたが、道路建設のため神社の境内に移されたそうである。今は、大土神社の駐車場で車と同居する肩身の狭い身の上である。

蛙の目の掘り込みは昔からあるとのこと。目を黒く塗つたのは神主さんのサービス。尚、お玉杓子については良く知らないとのことであったが、大土神社の左側を流れる六甲川にはお玉杓子に似た黒い石が五つあつた。この蛙岩は、無事に帰る(蛙)にかけて、登山者に親しまれているそうである。

また、この近くに伯母野山の高地性集落遺跡がある。

〔民話〕「六甲山」 ヤマケイ関西 2003年刊 p146 より

むかしこの岩は、夜ごとに大きな



蛙の姿になつて山道の真ん中まで出てきて、人々を驚かせた。そこで村人は出られぬよう、岩の回りに鉄の柵を作り、蛙まつりと称して岩を祀つた。この岩の後には、お玉杓子の形をした岩がいくつかあつて、毎年少しづつ大きくなつていたともいふ。



## ⑪ 知るべ 岩

蓬莱峠の阪急バス停「知るべ岩」の

前を向いた大土神社の蛙岩  
間暮れ、一人の京の座頭がせつかくの知るべ岩を見ることもかなわず、左の谷深く迷い込み、さまよううちに倒れてしまつた。里人は哀れと思ひねんごろに弔つて、以来この谷を座頭谷と呼んだ。

すぐ先の川の左岸に表示板があり、ガードレールを乗り越えて、道なき斜面を強引に降りると川べりにある。ごみが散乱している陰気なところに、木々に包まれて忘れ去られたように鎮座している。貴重な文化財なのに、嘆かわしい。座頭谷は知るべ岩から大平山に至る川沿いのハイキングコースであるが、道標が整備されておらず今でも迷いやすい。

## 〈伝承〉「六甲山ハイキング」

大西雄一著 創元社 1975年刊

p124より

碑文によると、むかし豊臣秀吉が有馬入湯の際ここで旅人がしばしば道に迷うと聞き、この岩に「右ありま道」と刻んで道しるべにしたとある。その後、江戸時代のある秋の夕



石碑の立つ知るべ岩

## ⑫ 老ヶ石

裏六甲は遺跡も少ないせいか、民話・伝承にまつわる岩石もすくない。老ヶ石は、その数少ない一つである。場所は、船坂橋から船坂谷を2kmほど登つた上流にあるこの大石は、地上に出ているだけでも高さ7m、横幅15mの大石で、近くには玉姫大神をまつる岩の祠がある。

全國を巡つて石を探し歩いている石職人が、老ヶ石の素晴らしさに感嘆し、石を切り出そうとしたところ、息せききつて村人たちがかけつけて

きた。

村人は石職人に、酒に酔つた勢いで石を切ろうとした男が石の中に吸い込まれるように消えてしまったことなど、この石に刃物をあてた者には恐ろしい祟りがあることを話して石切を思いとどまらせようとしたが、石職人は迷信として聞き入れなかつた。

石職人は石を切り始めた。静かな谷間に石を切る音がこだまし、村人たちはおそれおののきながら、石職人の一挙一動を遠巻きに見守つていた。突然、石を切るその手が止まつた。石職人は棒立ちになつたまま、打ちこまれた鑿のあとを見つめていた。何ごとが起つたのかとかけ寄つてきた村人の目に、鑿を打ちこんだ穴からまつ赤な血がほとばしって出でているのが映つた。「これは大変なことになつた。村の言い伝えを破つたからじや」村人たちは、後ろも振り返らず、村へ逃げ帰つた。その後、石職人は原因不明の高熱が出て、そのあげく気が狂つてしまつた。

甲・摩耶 昭文社 p21より

石に触れると老けるといわれる老ヶ石  
えがある。



了